

国際サーカス村通信	VOL.16 N007	2012年 9月 14日 (金)
		文責 西田 敬一
編集NPO 法人国際サーカス村協会	〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1	
Tel0277-70-5010 Fax0277-97-3688	mura@circus-mura.net	http://www.circus-mura.net

● サーカス学校再開への試み

サーカス学校が再開できるかは、まだ、未定だが、13名もの若者が体験入学を希望しているので、9月18日(火)から23日(日)まで、沢入で体験入学の授業を行うことにした。

この期間中に、もう一度、沢入サーカス学校体育館の排水溝など、放射線量の高かったところを測定し直し、汚泥などの処理が可能かを検討したいと考えている。

とりあえず沢入を離れて、一定期間、移動サーカス学校ができないかを検討してきたが、現状適当な場所も見つかっていない。この移動サーカス学校の計画を放棄しているわけではなく、また、今すぐ沢入での再開は考えてはいないので、正直なところ、身動きできないのが現状である。

実は、そうした実情を、体験入学にきた若者たちとも話しあいながら、今後の道を探りたいと考えている。

ただ問題は、サーカス学校に入学を希望する若者たちは、学校が再開できなければ、自分たちの進路をもう一度考え直さなければならないし、いつまでも、サーカス学校の再開を待つてはられないという現実に直面してしまうことである。

そのためにも、早く再開しなければならないのだが、繰り返しになるが、その解決策を見つけれない状況に追い込まれている。まずは、この状況を認識し、ここから一歩ずつ進んでいくしかないが、この問題を、入学希望者とどこまで共有できるかである。

体験入学を終えて、何人の若者が入学を希望するかも、サーカス学校の運営上、重要な課題となるのは言うまでもない。こうした問題を含めて、この一週間の体験入学で、少しでも再開に向けての方向性を探っていきたいと考えている。

ぜひ、皆様のご意見をお聞かせ願いたいところである。

*

今回の会報では、サーカス学校の研究生で、“旅する道化師と大道芸人たち”に参加した田中健太君が、大飯原発再稼働阻止のために現地に出かけ、抗議行動に参加した報告を掲載した。彼がなにを考え、どのような気持ちでこうした活動をおこない、今も活動していることを、ぜひ、会員に皆さんに知っていただきたいことに加えて、サーカス学校の再開もまた、原発問題と無縁とはいえないからである。

どのような環境になれば、サーカス学校が再開できるか。一方では、サーカス学校が休校状態にあるのは、風評被害の元になるので、そのことを声高にアピールしないでほしいという地域の人々の意見もある。しかし、自分たちがどのような状況に置かれているかを常にきちんと捉え、そうした状況のなかでどのようにサーカス学校の再開を目指すか。これは、ぼくら一人ひとりの生き方の問題なのだ。

ぜひ、一緒になって考えてもらいたい。(西田 敬一)

●初めてオキュパイ

沢入国際サーカス学校研究生

田中 健太

「国際サーカス村通信」をお読みのみなさん、こんにちは。沢入国際サーカス学校研究生の田中と申します。

このたび、僕は、6月30日午後から7月2日早朝まで実行された「関西電力大飯原子力発電所の人力による封鎖」に参加してきました。マスコミやインターネット等の報道で、事の顛末をご存知の方も多いと思いますが、いち参加者として、現場で何が起こっていたのか、できる限り書かせていただきました。

拙い文章で恐縮ですが、最後まで読んでいただけますと幸いです。

昔から原発は嫌いでした。僕の実家は浜岡原発から80km程のところであり、何かの集会に出かけると、よく反対の署名が置いてありました。親も昔から原発反対の考えを持っていて、実家には何冊かそんな本がありました。高校生の時、忌野清志郎を聴いてから、ますます僕は原発が嫌いになっていったのです。

だから福島第一原発の事故を聞いたとき、僕はそれほど驚きを感じませんでした。あの様な事故は、世界に原発がある限り、いつか必ず起こると思っていたからです(事故が起らなければ原発はOK、という意味ではありません。通常の運転で被曝してしまう労働者の被害や、核兵器に転用される危険などがありますので)。こんな悲惨な「人災」が起きる前に原発をなくせなかったことと、そのために真剣に行動しなかったことが、ただただ悔やまれてなりませんでした。僕も含めて、みんながもっと清志郎の歌やことばを真面目に聴いていればよかったです。

事故の後、福島第一原発から際限なく放出される放射性物質は、沢入国際サーカス学校がある群馬県の沢入地方にも降り注いできました。その結果、西田校長の判断で、学校は一時休校となりました。この判断については、批判も耳にしますが、僕は正しい決断だったと思っています。現在の自分の利益を重視するのか、それとも、未来の(他人の)子や孫の幸せを考えるのか、という岐路に立たされたとき、校長は、電力会社や政府とは違う道を選びました。原発問題に限らず、この判断は一種のスタンダードになるかもしれないと僕は思います。大飯で知り合った人たちに群馬県の状況を説明すると、「早く引っ越さなきゃ!」と口ぐちに言われました。批判すべきは、こんな状況を作り出した「犯人」たちの方でしょう。つまりは、電力会社、政治家、それらに追随してきた有権者たちです。この人たちのせいで、サーカス学校は休校になりました。

この恨みは、一生忘れません。

6月17日～6月19日

僕は、脱原発の活動をしている「経産省前テント広場」の皆さんが企画した「大飯原発再稼働反対ツアー」に参加しました。ツアーの集合場所には、僕が予想していたよりもはるかにたくさんの方が集まっていました。6台のバスが連なり、福井県の大飯町へ。

当初の予定ではこのツアーは大飯原発に行かない予定でした。福井市内でのデモに参加するのが目的でした。しかし、急きょ参加者のみで大飯町に向かうオプションツアーが企画され、大飯原発の入り口まで行けることになりました。僕は早速申し込んだのですが、結果的にこのオプションツアーがなければ、僕は原発前の占拠には参加していなかったでしょう(デモに参加するツアー及びオプ

ションツアーは、全国の皆さんのカンパによって成り立っていたと聞いています。皆さんのおかげで大きな経験をさせていただきました。本当にありがとうございます)。

福井市でのデモが終わった後、大飯町へ移動。大飯町には原発の助成金で造られた体育館や図書館、グラウンドなどが揃った総合公演があります。公園の中の建物が、原子炉をイメージしたデザインである様に感じました。

その公園の緑地部分に、いくつものテントが張られていました。原子力を讃える巨大なモニュメント（一見の価値あり。笑えます）には、楽器やスピーカーが置かれ、即席のステージが作られていました。柵にはメッセージが書かれた旗が、街灯には手作りのカワイイ傘が掛けられちゃってました。

助成金で造られた公園は「原発再稼働反対監視テント村」へと生まれ変わっていたのです。

その日の夕方から夜にかけては即席ステージでのライブ（バンド二組。どちらも最高でした）。夜が更けてからは、音を出さずに会議が始まりました。この会議で最初に出たのは「具体的に何をやれば制御棒を抜くのを阻止できるか」ということでした。

「制御棒を抜かせない」アピールの中で、聞いたことはあっても具体的に（直接的に）そのために何をするか？という話を、僕はあまり聞いたことがありませんでした。

そして、その場の皆に共通していたのが、「もう通常のデモやアピール行動や署名集めをしている段階ではない」という認識でした。もちろん、デモや署名を否定するわけではありませんが「もう再稼働の日取りまで決められようとしている状況では、より直接的な行動が必要では」というのが結論でした。それを踏まえて、再稼働が有力視されている6月30日から大飯原発の入り口の道路を座り込みで封鎖することになりました。

僕はこのとき知ったのですが、なんと大飯原発には、車が出入りできる道路が一本しかないのです。その道が塞がってしまえば、作業員や作業員は陸路で入ることができません。どうです？思わず鳥肌が立つ恐ろしさでしょう？海路で入るルートもあるのですが、もしも船の運航に支障をきたしたら、原子炉で事故が起きても対処できないかもしれません。ましてや、原子炉に火を入れる瞬間なんて、一番事故が起きやすいはずで、その時に道を塞がれてしまっているのは、（安全を第一に考えるなら）恐ろしくて、再稼働などできないはずで。

ただし、その分警察による過激な排除があることも予想できます。「とうとう人生初逮捕かもな…」と思いながら、その日は公園のあずまやで眠りました。

さて、どうして僕は道路の封鎖に参加したのでしょうか。

やはり、現地で活動する人たちの切迫感に触れたのが大きかったです。大飯のテント村にあったのはまさに「最前線」の空気でした。いつ警察が踏み込んできて逮捕されるか分からないなかで留まり、抗議を続けている人たちの想いに触れた以上、自分も前線に立たなくてはならないと思いました。

もうひとつは、再稼働を阻止するために、自分は体を動かすしかないと感じたからです。僕は、俳優や音楽家の様に、知名度で人を動かすことはできません。天才的な頭脳でまったく新しい方法を考えて原発を止めることもできません。結局、僕は現場で体を張るしかないんだと思ったのです。

6月29日

僕はふたたび、今度はひとりで、大飯町に着きました。公園に入ると、明らかに以前よりもテントと人の数が増えていて、テンションが上がりました。その日の夜、6月30日の実際の行動についての打ち合わせが行われました。まず、強制排除と逮捕される可能性についての認識が共有されます。身分の分かるものや、仲間の連絡先が分かるものは現場に持って行かない。逮捕された場合、必ず完全黙秘すること（世間話に対しても返答しない。弁護士以外の面会人にも完全黙秘すること）。逮捕されたらすぐ警察に「救援連絡センター03-3591-1301」に連絡させ、センターの弁護士を選任するこ

と（通常のデモなどでも拘束されることは有り得ます。そんなとき必ず役に立つので、皆さんこの番号はぜひ覚えていましょう）など。これらの情報は僕にとってはわりと馴染みのあることだったのですが、意外と知らない人が多く、原発事故の後に行動することを始めた人たちの層が大きいことを実感しました。

それと同時に、原発事故以前からの様々な行動の経験を、いかに新しい行動に継承するかという課題を感じました。実際、現場では若い人と年配の方が、行動の方向についてたくさん会話をしていました。さらに新しい動きの胎動を感じます。

その後、最初に道路を封鎖する実行部隊の打ち合わせがあったのですが、ひとつ問題が。

人数が少ない…。

行動の規模や危険さを考えると、明らかに人手が足りないような気がします。それでも少ない人の中から、当日の担当を決めました。大飯原発の前の道路だけでなく、原発の敷地内（原発建屋、エネルギー館へと続く電力会社の私道）も占拠してしまうことになったので、内と外、両方に人員を配置します（ネット上に「外の道路だけでやるはずだったのに、無計画すぎないか？日程も、聞いていたものと違う」という意見がありましたが、無計画だったわけではなく、行動の性質上、すべての情報を周知させられなかったのです）。

僕は、公道と電力会社の私道との間に、電力会社が（再稼働が決まってから）設置した開閉式のゲート（学校の校門をもっと味気なく、ものものしくした感じですが）を封鎖する班に入りました。

まず、ゲートの前に、道を塞ぐかたちで車を何台か横付けし、車とゲートをつないでゲートを開けられなくします。その後、体もゲートに縛り付け、ゲートの開閉をできなくしてしまう作戦です。

自分の役割は決まったものの、正直不安が募ります。この人数で、素人の僕たちで、本当にゲートを占拠できるのだろうか…。最初が成功したとしても、占拠した状態を維持できるのだろうか…。「警備員は職務上、殴ったりできないから」とは言われましたが、人間、興奮すると何をするのか分かりません。しかし、いまさら引き返すこともできず、決行の時を待ちました。

いよいよ出発の時が来ました。車に分乗して、雨の中原発前のゲートへと向かいます。道の途中にも電力会社の監視員らしき人物がいて、トランシーバーで何やら報告しています。さらに不安が募ります。

ゲートに到着しました。車をゲートに横付けし、鎖をゲートの開閉部分に巻きつけようとはしますが、警備員の人たちも仕事なので、懸命に止めさせようとはします。もみ合いの中で、一度は鎖がゲートから引き剥がされてしまいます。しかし、ゲートの内側、外側、両方からの仲間の援護のおかげで、どうにか鎖を巻きつけ、鍵をつけてゲートを封鎖することができました（この部分を書いていて、なんだか動悸が激しくなってきました）。さらに、車同士を鎖で繋ぎ、最後に自分の身体にも鎖を巻きつけ鍵をかけました。ゲートの内側にも車が並べられ、ゲートの開閉は不可能な状態になりました。これでゲートの占拠は完了です…あれ？意外と簡単に成功しちゃいました。もしかして、警備員の皆さんも、原発なんか守るのが嫌で、ちょっと手を抜いてくれたんでしょうか？

もちろん一番大きな勝因は、行動に参加した皆がそれぞれの仕事を懸命に頑張ったからです。でも…それでもちょっと簡単すぎた気がします。僕たちはひとつも武器を持っていませんし、人を殴ることもしません。でも、もしも僕らが武装勢力だったらどうでしょう。僕らが道路の封鎖ではなく、原子炉の破壊を目的にしていたら？こんなにも簡単に入り口を突破されてよいのでしょうか。どうやら電力会社と原子力行政は、津波だけでなく、人間によるトラブル（向こう側にとっての）も「想定外」だったようです。

さて、とりあえず道路の封鎖に成功した僕らは新たにロープを張ったり、原発建屋の方に警備員を誘導したりして陣地を構築、拡大します。しばらくすると、テント村で同時進行していたイベントに参加していた人たちが来てくれました。

以降、来てくれた人たち皆さんに対してですが、初対面でほとんど話もしたことがない人たちのことを、こんなに頼もしく、嬉しく思ったのは初めてでした。来てくれた人たちの中には道路封鎖のことを知らず、音楽のライブに軽く参加するつもりの人もいたはずですが、それでも、すぐに覚悟を決めて前線に出てきてくれたのです。なんてありがたいことでしょう。

現金なもので、こうなると「これは…なんとかならんじゃないか」と思えてきます。すぐに雨の中、「再稼働反対!!」「原発いらない!!」とコールが始まります。警備員さんに語りかけている人もいます。楽器も出てきました。ネット中継も始まっています。さらに、時間が経つにつれどんどん人が来てくれます。

そんななか、警備員さん側にも奥の方から応援部隊がやってきました。そのうち何人かは、手に何かを抱えています。どうやら立て看板のようです。「ここからは関西電力の私有地です。部外者の立ち入りを禁じます」と書いてあります。…意図がよくわかりません。何故、わざわざ看板が出てくるのでしょうか。

さらに、マイクで「ここは私有地です。早く立ち退いてください。これは不法侵入です」とアナウンスをします（警察の場合は、これに「道路交通法違反」が加わります）。

うーん…向こうの立場としては正当な主張なのでしょうが…。

確かにこの行動は、現在の「法律」に触れています。そのことに対する批判も目にしました。しかし僕たちは「生存の権利」を行使したいのです。生存する権利は経済の成長よりも優先されるはずで（「あなたのこどもを一千万円で売れ」と言われて、売れますか）。大きな力に（考えによっては「国家」ですらない）脅かされたとき、人は抵抗することができます。その権利は、法律によって与えられるものではなく、ひとりひとりがその行動によって獲得するものです。その行動が正当なものかという検証は、常になされるべきですが、法律論のみではできないでしょう。

また、僕はこの行動が正義の行いだとも思いません。これは正義、悪という概念以前の、生きるために呼吸をする、ものを食べるという行為と同じことです。福島事故を経験した僕たちにとってはいうまでもないことですが、原子力（核）は呼吸や食事も妨害します。

さて、そんなことを考えている間に、何やら動きが見えてきました。小浜署の機動隊の皆さんの到着です。さらに時間を置いて警視庁第一機動隊の皆さんもやってきました。

小浜署の皆さんの装備がなんだか旧く、くたびれた印象だったのに比べ、バリバリの最新装備です。地方と中央の権力の差を感じました。

機動隊が動員されたことによって、一気に緊張感が高まりましたが、突入などはかけてこず、原発側の道路（関電の敷地内）に盾を並べて威圧するほか、ビデオカメラで僕らの顔を記録する（明確な肖像権の侵害です）、拡声器で立ち退きを要求する（こちらが再稼働の正当性について問い返したり、反論したりしても延々と同じことばを繰り返しています）ばかりです。

現場で周りの人と話した結論なのですが、国も電力会社も騒動を起こしたくなかったのだと思います。再稼働を巡りトラブルが起きているという、この（本来）圧倒的な現実を隠蔽しようと必死だったのでしょう。

一時、緊張で固まっていた皆も次第と動きを激しくしていきます。最終防衛ライン（ゲート）で突入に備えていた僕も、いい加減、鎖が体にこすれて痛くなってきたので度々鎖を外してうろつくことにします。念のため書いておくと、遊んでいたわけじゃないんです。この段階になると、一気に制圧をかけてくるというわけではありませんが、機動隊も圧力を強め、圧迫をかけてきたので、あちこちで押し合いが起きていました。公道側にも既に機動隊が配置され、私服、制服の警官があちこちから侵入しようとしてきます。人手が足りなさそうな場所に行って、人を集めて防御を固めます。そんな状況の中、関電の敷地側の最前線に出てみると…なんだか挙動の怪しい機動隊員（警視庁）がいます。彼はゆっくりと体を揺らし、時々、瞬きにしては不自然な時間、目を瞑っては少しよろけています。

そう、彼は必至で眠気と戦っていたのです。思わず「大丈夫ですか」と聞いてしまいましたが、答えくれませんでした。よく見ると、機動隊の皆さん、疲れた顔をしています。

そりゃそうです。東京で突然収集をかけられ、長い間車に揺られ（車の中で眠るわけにもいかないのでしょ）、大雨の中放り出されてずっと立っているんですから。彼らをこんな過酷な現場に送り込んだ大元の政治家や官僚、経済界の連中は、今頃暖かい安全な（原発が爆発してもすぐ逃げられる）場所にいるんでしょうね。やってられないよね。

体力的には機動隊員の方が勝っているのですが、望みもせず仕事で来ている人間と、自分の意志でここで叫んでいる人間の差でしょうか、「再稼働反対!!」のコールはどんどん激しさを増し、ドラムのビートに合わせて強烈なジャムセッションを起こしています。コールの合間には拡声器が回され、それぞれが想いの丈をぶつけていきます。ミュージシャンも拡声器で歌います。「野田！今すぐここに来い!!」首相へのメッセージも叫ばれました。

誰からともなく、アピールは警察の皆さんと発電所の皆さんへと語りかける内容になっていきました。「今、ここで原発事故が起こったら、最初にあなた達が巻き込まれる。お偉いさんはそれを知っていて、あなた達を送りこんだんだ」「君たちや君たちの家族にも、放射能は降ってくるんだ」「皆さんも心の中でおかしいと思っているんじゃないですか？もし思っているなら、向く方向を変えて一緒に行動しましょう」「今、仕事を捨てることはできないかもしれない。でも、家に帰ったら今日聞いたことをどうか考えてください」「放射線については色々な資料があるから、読んで下さい。騙されちゃだめだ!!」

これらの語りかけは誰かの指示ではなく、自然発生的に起こっていったように思います。現場に立っている人間にとって、放射能の脅威は平等です。生存の権利も平等です。

もしも、これを読んでくれている電力会社の人、原子力関係の仕事をしている人、警察で働いている人（公安のチェックをしてくれていますか？）、どうか職場から逃げ出して下さい。それは全然、卑怯なことではありません。あなたの決断に勇気づけられる人はたくさんいます。

6月30日

いつの間にか日付が変わり、夜が明け始めました。皆、ずぶ濡れの体と、酷使されて音にならない悲鳴を上げ続ける喉を抱えながら、無理やり立ち上がろうとする興奮を抑えて、交代で仮眠をとります。

夜が明けると、東京、愛知から機動隊員が増員されました。それを目にしたとき、正直ドッと疲れましたが、そこに東京、福島からの援軍が到着しました。以前の大飯ツアーで出会った顔がたくさん見つかります。その後も単発でどんどん援軍がやってきてくれました。

救援物資も続々届きます。今回の行動では後方支援の大切さが身にしみました。「大飯原発正門前デモ隊様」の宛先でパン屋さんがパンを送ってくれました。とてもおいしかったです。物資以外にも、駅と現場を何度もピストン輸送してくれた人もいたそうです。

そして、福島の女性がマイクを握りました。福島の現状、家族や友人たちを残して避難しなければいけなかった悔しさ、嘘を重ねて補助金と雇用を振りかざす国と企業の犯罪性を警察と警備員に語りかけます。そして「あなたのお母さんはあなたに『命を奪え』とは教えなかったはずです。私も母親だからわかる。もう一度、自分の親や子供のことを考えてみてください」

衝撃的なスピーチでした。小柄な方だったのですが、その言葉には破壊にさらされ、脅威に追い詰められた人だけが持つ迫力がありました。その力は確実に人の心の何かを鷲掴みにしました。だって、

機動隊員が目を赤くして涙を流していたのですから。きっと、寝不足のせいだけではないはずですよ。

昼前になり、ニュースが飛び込んできました。「国と関西電力は予定通り大飯原発の再稼働を行う。必要な人員は港から船で輸送し、牧野経産副大臣らはオフサイドセンターから（当時はオフサイドセンターと言っていました）起動の指示を行う」

道路が封鎖されているにも関わらず、です。これほど間近で多くの人が声を上げているのに、です。この状況を全世界が注目しているのに、です。

僕は、まるで殺意の様な怒りを感じ、体の鎖を外して機動隊の前に出て行きました。こいつらのせいだ、と思いました。あれほど真剣な訴えを聞き、人によっては少なからず動揺していたのに、人間よりも再稼働を守ろうとしたこいつらのせいだ、と思いました。

こいつらのせいで、またみんな怯えて暮さなきゃいけない。はした金と引き換えに被曝しなきゃいけない。

ふと奥の方を見ると、福井と東京の指揮官らしき二人がにこやかに談笑していました。何が可笑しいんだ、クソ野郎。警官のくせに、人の命が危険にさらされるのがそんなに嬉しいのでしょうか。それとも、自分たちの非人間性を世界中に宣伝できたのが嬉しいのでしょうか。それとも、何にも考えていないのでしょうか。とにかく、思い出すといまだに腹が立ちます。

周りでは何人かが僕と同じように機動隊員を睨みつけています。そして、それ以外の人達は太鼓を叩き、踊り狂っています。

僕は最初、意味がよく分かりませんでした。何故この状況で、笑いながら踊っていられるのかと。でも、少ししてから気づきました。皆、僕と一緒にのだと。

皆、暴力衝動を必死に抑えつけていたのだと思います。太鼓を叩かなければ、踊らなければ、笑わなければ、リズムではなく暴力に場が支配されていたかもしれません。そうなれば向こうの思うツボでした。否、それ以上に取り返しのつかないことになっていたでしょう。世界に音楽があつてよかった。おかげで殴り、殴られるよりも楽しいことができます。

遅まきながらダンスに突入、参加した僕。しばらくは怒りをスッ飛ばして踊っていたのですが、交替した機動隊員の列を見た時、ひとりの隊員に目が留まりました。その隊員はおそらく 30 代前半くらいでしょうか。小刻みに体を震わせ、顔にはむき出しの憎悪を顕にしています。機動隊員は皆、無表情になる（装う）訓練を受けているはずですが、その隊員は僕たちへの怒りを全く隠そうとしません。まあ、ある意味親しみやすい人物といえるかもしれませんが、とにかく他の隊員とは違って簡単に「一線」を越えてきそうな臭いがしました。僕は踊りを止め、その隊員を監視することにしました。

監視を始めて少しすると、ある男性がその隊員に話しかけ始めました（その男性は、端から複数の隊員に語りかけていました）。身振り手振りを交えながら男性が自分の意志を伝えようとする、隊員は「下がれ!!」と怒号を発し、その手を払いました（男性の手がその隊員に直接触れたわけではありません）。僕には、これは警官としてやってはならない行為に思えます。その後も男性が語りかけると「黙れ!」「下がれ!」と叫び、男性の手が目の前に来ると、払おうと（掴もうと？）しています。僕は、隊員が大きく動くたびに身構えながら、何かあったとき証拠を残すためテレビカメラを捜していました（このときにはマスコミが何社もゲート内部まで入っていました）。折よく「共同通信社」のカメラがこのやりとりを撮影し始めました。効果はテキメン。目に見えて、隊員の動きがおとなしくなり、チラチラとカメラを気にしています。

ところがホッとしたのも束の間、共同通信社のカメラは必要な撮影を済ませると、さっさと去ってしまったのです。僕は心の中で「さすが共同通信!」と拍手していたのに…。

途端に隊員の動きが激しくなりました。表情も露骨に変わるので可笑しかったくらいです。僕は慌てて、ビデオカメラで映像を撮っている人たちに呼びかけたのですが、周囲の音が大きく（再稼働反対!!）、また、昨日から叫び続けていたせいで声がほとんど出ず、なかなか気づいてもらえません。

そんなとき、地方テレビのカメラマンが近くにきたので、男性と隊員を指さし「撮って！あれ撮って！」と叫ぶと、そのカメラマンは隊員の撮影を始めてくれました。推測ですが、こちらの意図を理解してうえで撮影してくれていたようでした。お願いしたとき、目で軽く頷いてくれたように見えましたし、その隊員が交替するまで撮り続けてくれたからです。どちらにせよ、非常に助かりました。ありがとうございました。

この隊員のエピソードで記憶に残っているものをもうひとつ。

先の男性が移動した後、年配の女性が黒砂糖を持って「どうぞ」と隊員に差し出すと「いらん!!」と怒鳴りつけました。これは…駄目ですよ。自分の母親か、もしかしたら祖母かもしれないような年齢の女性にこの言葉づかいは駄目です。

僕たちの行動が嫌いだというなら、それは仕方ありません。でも、人と人との関係の中で最低限守らなければならないものがあるのではないのでしょうか。今回の彼の行動から、そんなことも考えさせられました。

7月1日

14:30 頃、警察の動きが慌ただしくなり、とうとう強制排除が行われそうだと、という情報が伝わってきました。皆で腕を組み、何重にも人の壁を作ってその時を待ちます。僕も持ち場につき、鎖を巻きつけて鍵をかけました。

しばらくすると警察が「速やかに車を動かして退去しなさい！」と最後通告を始めました（一部マスコミには「退去してください」と警察が言ったと書いてありましたが、僕が聞いた限り敬語は一切使っていませんでした）。警察はアナウンスを始めたものの、なかなか具体的な動きを見せません。アナウンスに負けずに「再稼働反対!!」と叫んで、何とか集中力を維持します。

そしてとうとう強制排除が、金と面子のために決行されました。

公道側では、座って人の壁を作っていた人たちを、ひとりにつき警官4人で取り囲み、抗議の声を無視して、物のように運んでいきました。この光景を目の当たりにして、僕は思わず声を上げてしまいました。世の中には警官に憧れる子どもが大勢いるはずですよ。果たして、そんな子どもたちがこの光景を見たら、どんな気持ちになるのでしょうか。警察の皆さん、どうか、夢を壊さない仕事をして下さい。

一方、関西電力の敷地側では、機動隊が盾を使って人々を圧迫してきました。皆「暴力反対!!」と叫びながら手を組み、あるいは、手を上に挙げて、非暴力の姿勢を貫きながら抵抗しますが、だんだん圧迫されていきます。

強制排除が決行されてから、3時間ほどが経ちました。辺りはすっかり暗くなっています。機動隊には、だいぶ押し込まれたものの、皆、必死に持ちこたえています。公道側は、皆排除され、警官がゲートのすぐ前に立っています。立ち退かされた人たちも、警官隊を挟んで、いまだ挫けることなく、叫び、旗を振っています。

警官がゲートに近づき、僕の鎖に手を掛けました。僕がとっさに「やめてくれ！僕の服に勝手に触らないでくれ！」と言うと、「服じゃねえだろ、ただの鎖だろ」「違うよ！これがファッションなんだよ。これが今年の流行なんだ」と言う、思わず吹き出してしまった警官（カワイイ笑顔でした）は、いったん下がって行きました。どこかへ、鎖を切る道具を取りに行ったのでしょうか。

そして、あの瞬間がやってきました。再稼働が強行されたのです。

ニュースは、すぐに僕たちの間を飛び交いました。

そして、集まった全ての仲間の怒りと悲しみと悔しさは、叫びと、音楽と、非暴力のために開いて挙げられた手と、ふられる旗と、不服従の眼差しに昇華されました。

その場に存在しなかったのは「諦め」でした。

より一層、激しさを増した「再稼働反対!!」の叫び。僕らチェーン組は、ゲートの上によじ登って手を振り、圧迫に抵抗する仲間と、警官隊に隔てられて尚、道の向こうで抵抗を続ける仲間を煽り続けます。

どのくらい時間が経ったのでしょうか。目の前にいた公道側の警官隊が、妙な動きを始めました。全員、列を作って退散していくのです。僕は「ああ、最後の突入の準備をしに行くのだな」と思い、緊張していたのですが、いつまで経っても戻ってきません。それどころか、圧迫を加えていた機動隊も、最低限の人員だけを残して撤去していきます。そして遂に、仲間を分断していた警官隊までも撤退。

何が起きているのかわからず、ポカンとしている僕のところに、道の向こうから仲間たちが押し寄せてきます。笑顔、笑顔、笑顔、笑顔、笑顔の洪水です。そのとき、やっと分かりました。僕たちは自由なのです。

今度は僕も素直に笑えます。

いても立ってもいられず、鎖を外して、踊りの中に飛び込みました。合言葉はこのときも変わりません。「再稼働反対!!」

僕は、3.11 以前にもいくつかの行動に参加してきました。そんな僕を見て「君は 60 年代安保の頃に生まれていたらよかったね」と冗談まじりに言った人がいました。でも今、わかりました。生まれた時代なんか関係ない。どんな時代だろうと、命と、ひとりの幸福が脅かされる時、そこには必ず抵抗力が存在します。存在しなければなりません。だけど今、今は、この場所に立ててよかった。この場所でみんなに出会えてよかった。自由の意味を知ることができて、よかった。

その後、僕たちはゴミを片づけ、もう一度増員された機動隊と対峙してから（このときの太鼓も凄かった。行動の中で最も戦闘的な響きがしていました。あれがなかったら、もう一度、機動隊とは向かい合えなかったかも）大飯原発前から撤収しました。

7月2日

いつの間にか日付は変わり、7月2日の午前2:00になっていました。みんなジャニス・ジョプリンのようにハスキーになった声で再会を誓い、大飯原発の封鎖は終わったのでした。

さて、僕が体験した6月30日～7月2日に渡る大飯原発での行動はこんな感じでした。ただし、書き切れなかったエピソードはまだたくさんあります。そちらの方は、皆さまと僕がどこかでお会いした時に直接お話ししましょう。その時、この活動に対する、あるいは原発に関する、忌憚のないお考えをお聞かせ下さい。

この文章は、日ごろお世話になっている ACC の辻さんの「書いてよ」という（酔っ払った）ひとことで書かせていただきました。しかし、これを書くにあたって、少なからず葛藤もありました。なぜなら、大飯原発は再稼働されてしまったからです。その結果、発電所では作業員の皆さんが被曝の脅威にさらされ、周りの地域では事故の危険に怯え、放射能により海も山も空気も汚染される「日常」が再開されました。

この一点を見れば、大飯原発での行動は「失敗」に終わったといえるでしょう。この結果を考えると、僕は、あの現場で起こったことを素直に書けるのだろうかと思ったのです。あの時感じた高揚感がとても大きかっただけに、なおさらでした。

でも、しばらくしてから思い直しました。「ま、それはそれとしてだ」。何が「それ」なのかは自分

でもよくわかりませんが（酔っ払っていたせいかもしれません）。

「あんなのは過激派がやること」「法律は守らなくちゃ」と思う方、この文章を読んで、どう思われましたか？納得はできなくても結構です。でも、理解はしてほしいです。僕があなたのことを仲間だと思ふことを許して下さい。できれば、僕のことを仲間だと思って下さい。一緒に、原発も、核兵器もない世界を実現させましょう。

そのために、まず僕たちが自由になりましょう。そうしたら、きっと簡単なことなんです。

ボーナス・トラック

ここからは、ネットTV等に映らなかったステキな後日談をお届けします。7月2日の夜、皆で集まってあれこれ話していると、バイクのエンジン音が公園に近づいてきました。「ああ、暴走族も頑張ってるねえ」等と言っていると、そのエンジン音は公園に横付けされ、「何してんだテメーら!! さっさと出て行け!!」という声が聞こえてきました。どうやら、本当に頑張っている暴走族さんのようです。

「せっかく機動隊を相手に無傷だったのに…」と思いながら、声がする方に行ってみると、バイクに跨った青年たちの姿が。

話を聞いてみると、彼らは福井で右翼主義の活動をしていて、仕事は、原発の整備をしているとか。僕たちの行動をテレビで見て、抗議しにバイクでやってきたそうです。最初こそお互いやや喧嘩腰だったのですが、暴力には一度も訴えることなく、話はずみしました。

原発がいかに危険なものか。原発がないと仕事もないという現状。ドイツでは原発をなくして景気を好転させた。美浜原発は俺たちももう危ないと思う。警察のやり方には俺たちも腹を立てている。そして、僕にはよくわかりませんでしたが、バイクの話でも盛り上がっていました。

最後には「ま、お互い頑張ろうや」とみんなと握手して帰って行きました。

とても気持ちのよい、真面目な右翼さんたちでした。話の途中に「イカン、説得されそうや」と笑っていたのが忘れられません。

僕は、脱原発の活動の中で、「日の丸」が振られているのをずっと嬉しく思っていました（大飯の行動でも振られていました）。今まで反目することしかできなかった（僕にとっては）相手と協力し合えるのが嬉しかったのです。

でも今回の出会いは、それすら超えていました。たとえ主張は違っても、理解し合えることが立証されたのです。

大飯に行ってよかった。



『オキュパイ大飯の乱』

4月中旬に大飯原発直近にテントを張り、原発再稼働を監視した闘いは、6月30日～7月2日には数百人が車両でバリケードを築き座り込む、再稼働阻止の直接行動として爆発しました。この闘いを中心的に担ってきた20名近くの仲間（この中には尼崎から参加した人もいます）の闘争報告。（「社会運動情報・阪神」ブログ記事より一部抜粋）

■A5版・108ページ・500円

■注文先（社会運動情報・阪神）

メール shaj@triton.ocn.ne.jp / Fax 06-6428-7709

●人類発祥の地からやってきたサーカス

「アフリカン・ドリーム・サーカス」アテンド記

去る8月6日から26日までの約3週間、野外民族博物館リトルワールド（愛知県犬山市）に、先輩の大野洋子さんの招聘でエチオピアから10名のアーティストが来日し、「アフリカン・ドリーム・サーカス」公演を行いました。私はメンバーの通訳ほか雑用として、エチオピアの人たちと仕事、それに寝食を共にするという任務を与えられ、愛知県に滞在してまいりました。

*

エチオピア。その国名を聞いたとき、どこにあるのか、首都はどこなのかもピンとこず、とにかくえらい遠い国だろうと迎えた来日の日。最初はトラブル続きでした。まず7月31日、ゼネラルマネージャーのイエーナがメンバーたちより一日早く来日。大野さんと3人で、成田でメンバーたちを迎える準備をしていました。と、早速トラブル発生。メンバーたちが予定通りの飛行機に乗れなかったというではありませんか。しかも、機内に預けた荷物がいくつか紛失。荷物の中には舞台道具も含まれているとのこと。一同、引く血の気。大野さんがすぐに航空会社や旅行代理店、アディスアベバ空港、経由先のトルコ・イスタンブール空港、そして成田空港に幾度となく問い合わせ、イエーナはアディスアベバのメンバーたちと連絡を取り合うも、返ってくるのは異口同音に「ここにはありません」のひと言。エチオピアはやはり遠い国でした。荷物の行方を追うのと同時進行で、メンバーたちの新しいフライトを確保。と同時に、舞台道具が万一間に合わなかった場合ショーをどうするか、考えます。休憩がてら成田山に参拝。手を合わせるも、トラブルは続きました。

変更後のフライトで、3日（初演前日）、成田空港にてメンバーたち全員と無事に会うことができ、行方不明だった荷物もすべて到着したことを確認。ほっと一息…ですが、のんびり喜んでいる暇はありません。到着が遅れたため、来日した翌日に本番を迎えることになった（もともとの予定ではリハーサル日を2日間とってありました）ので、メンバーたちはすぐに公演場所のリトルワールドへ新幹線で移動。私は代表の西田さんと道具や荷物を、ついこの間「旅する道化師と大道芸人たち」で酷使されたばかりのワゴン車に積み込み、高速道路を走りました。

夕方に全員到着。この日は簡単なリハーサルを行い、翌日なんとか迎えた初日、初演。私は音響操作を行うため、バックステージでイエーナが操作するのを見てメモしていました。時差ボケと疲れと慣れない気候と…いまひとつ本調子ではなさそうなメンバーたち。と、突然、本番中のアーティストがひとり、飛び跳ねながらバックステージに駆け込んできたではありませんか。足を押さえています。アクロバットの演目でケガ。レントゲンを撮ってみると、なんと骨折。一か月は安静にと医者に言われ、松葉杖をついて戻ってきた彼を見るが早いかな、急いでショー内容の変更の話し合い。その他、パフォーマンス中に道具の不具合発覚。材料を取り寄せ、補強…。

2、3日の間に色々な出来事が目まぐるしく動いていました。冷静に対処するリトルワールドの担当の方々や、先輩の背中を見ていると、1990年代、社会主義から民主主義へ移行してすぐのモンゴルからサーカスと呼んだことや、昨年、チリ・コロンビア・エクアドルのからアーティストを集めて行ったショーなど、アフタークラウディカンパニーとNPO法人国際サーカス村協会がこれまでやってきた仕事、そして、それらを受け入れ、ショーを行ってきたリトルワールドの方々のご苦勞が思われ、無意識に、ただただ感嘆していたのでした。

どたばたで初日を迎えてから、ショーが一回終わるたびに「こうはできないか」「こうしようか」

と、話し合いに変更を重ねて、前の回よりよくなるように努めた最初の数日間。そうして一週間ほど経つと、日本のリズムに慣れてきたメンバーたちは、自然と、はじけるような笑顔をまんべんなく振るまうようになり、「ヘイ！」と声が出るようになり、だんだん本来のパフォーマンスができていくようになっていた。

*

さて、暗い苦勞話は置いておき、内容に触れたいと思います。今回のアフリカン・ドリーム・サーカス公演が決まったとき、サーカス技のほかに、もうひとつ楽しみがありました。それは、民族舞踊。エチオピアには 80 を越す民族が暮らしていると言われ、民族、地域ごとに異なる舞踊があるとか。今回のショーにはふたつのエチオピア民族舞踊が組み込まれていました。

ひとつはアムハラ族の民族舞踊「エクススタ」。肩や胸など上半身を揺さぶる動きが主で、とりわけ左右の肩甲骨を激しく動かすのは、迫力がありました。上半身を揺さぶるたびに、衣装の肩についている飾りボタンが振られ、シャンシャンと音が鳴ります。人類発祥の地と呼ばれるエチオピアで、なぜこのような動きが生まれ、踊られるようになったのか、興味がわきました。

衣装は緑色で、男性は半そでシャツに短パン、女性はワンピースに帯を巻いていました。それも素敵でしたが、男性は上半身はただで踊った方が、鍛えられた身体が揺れる動きがわかりやすく、かっこよいと思うのですが。動画配信サイトでいくつか観たエクススタでも、人々は上下に衣服をまとっているの、宗教的な意味か、何かルールがあるのかもしれませんが。

(参照 : Jacky ethiopia new music "sela bey"!! <http://www.youtube.com/watch?v=y8lvSfcAjJQ>)



踊りの最後に、女性が床で四つん這いになり体を震わせる動き（左写真参照）がありました。これは、植物（農作物）が育っていく姿だとか。その後ろで胸を大きく開き、天を仰ぐようにゆったりと左右を交互に向く男性陣。今回この踊りで使われた曲は、エジプト文明を育んだ肥沃な流域、世界最長級の河川、ナイル河を讃えたものなそう、ああ、だから衣装が緑色なのかな、と思いました。



↑女性メンバーのひとり、ネツィのグラギニア時の衣装。

もうひとつの踊りは「グラギニア」(グラゲダンス)。上下とも真っ白な衣装で、女性は髪をまとめ、黄色い布で覆っていました。エクススタもですが、衣装にはさりげなくラスタカラー（赤・黄・緑の、エチオピア国旗の色のこと）があしらってあります。この踊りはアップテンポな曲に合わせてエクススタよりも激しく動きます。両足でビートを刻みながら、「コウチョ」という食べ物を作っている様を表しているようで、小麦を挽いたり、包丁で切ったり、できた料理を並べたり、女の子たちがお化粧をしたり、料理ができ上がってみんなで喜んだりといった動きが表されており、彼らの生活、暮らしぶりが垣間見えるようでした。

どちらも結婚式や祝日に踊られるようで、観ているこちらにも思わず身体を動かして、彼らの輪の中に入りたくくなるような踊りでした。

生活面でも、初めて接するエチオピアの人たちの習慣はどれも面白くて、発見、勉強の連続でした。例えば、食事。単位ごと（たとえば家族）に、全員がそろってから、ひとつの大皿から手で一斉に食べ始めるというスタイル。独り

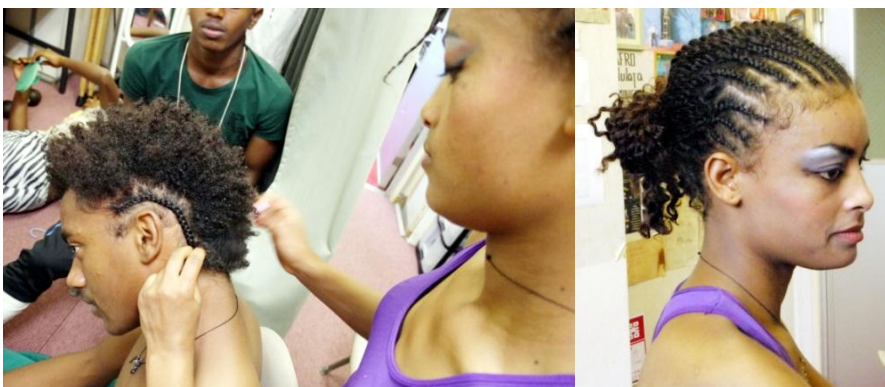
で食事をするのはあまりないそうです。ある夜、メンバーの若い男の子たちが、買い物にでかけたひとりの帰りを待って、お腹を空かせながら「いつ帰ってくるんだろ？彼が帰ってこないよ、僕たちごはんを食べ始められない」と、作った料理を目の前に、テーブルに頬杖をつきながら長いこと待っていたのは印象的でした。

それと、彼らはフレンドリーというか、他人に話しかけることに臆しませんでした。気づいたら、そこらへんの誰かに話しかけていました。日本語なんて全然わからないはずなのに。駅のホームで電車を待っているとき隣にいた人に「コンニチハ」、道端で浴衣を着た女の子たちに「キレイ！一緒に写真撮らせて」、バスの中でお年寄りや女性が立っているのを見るや否やアムハラ語（エチオピアの公用語）で「そこのあなた、ネイ！あぁ、アユミ、日本語でネイってなんて言うの？オイデ？オイデ！ここに座りなよ」、夜、屋外でガラスの前でストリートダンスの練習をしている若者たちに「カッコイイね！練習してるとこ見せてもらっていい？」…。

そんな彼らの行動を、私は「お国柄」と見ていたのですが、ふと、日本もこうだったのかもしれない、と思ったのです。知らない人同士が、道すがら声を掛け合うコミュニケーション。別にどうってことないことを。これが普通の、自然な光景なのでは、と。話しかけられた日本人たちは、戸惑い、はにかみながらも「サーカスやってるの？観に行くよ！」と、笑顔で応えていました。なんだかとても懐かしい光景を見ているようでした。私は、いつから、どうして、道ですれ違う人たちに声をかけなくなったんだろう、人と触れあう機会を自分から避けるようになったんだろう、どうして同じマンションに住んでいる隣の人の顔を知らないんだろう…。人類発祥の地からやってきた彼らに「人とは」を考えさせられた3週間でもありました。

そんな私が、こういったコミュニケーションは日本にもあるぞと強く感じた場合は、**3.11**以降の反原発デモや集会でした。話が反れそうなのでここでは割愛させていただきますが。

とはいえ、もちろん楽しいことや感心することばかりではありませんでした。まず、待ち合わせ時間は、あつてないようなものです。これは想定の内。とはいえ、朝は闘いでした。集合時間の一時間前から声かけをしていましたが、**5分前**になってからごはんを食べ始めたり、シャワーを浴び始めたりする猛者たち。みんな遅いなあ、早く早く。あるとき、ひとりが大遅刻（ショーには間に合いません。念のため）。あれおかしいな、この人は今朝はずいぶん早く起きて準備を始めていたはず。一体何をしていたのと尋ねたら、「髪を編み込んでたの」。これは彼らの身だしなみであり、オシャレのひとつ。頭ごなしに「やらないで」とも言えません。



[写真左]髪の設定は、美容院でやってもらうものではありません。メンバー同士で編み込みます。手際よく正確で、すごい速さ！
[右]オール編み込み、完成形。ヘアゴムなどは一切使わず、1週間くらいもつようです。

そのほかにも、毎日色々な出来事があり、どう示せば彼らに通じるんだろう…と悩んだり、私、自分の任務を遂行できていないじゃないか…と情けなくなったりしました。食事が喉を通らないとはこのことか、と新しい経験をさせてもらった日もありました（おかげさまで**3kg**の減量に成功しました）。

と、最後にまた愚痴に戻ってしまいましたが、今回の仕事は貴重な経験で、たくさん勉強させてもらったことに間違いありません。至らない点が多くて申し訳ありませんでしたが、リトルワールドの



みなさん、お世話になりました。先輩に学び、今後も頑張ります。

とにかく明るくて、半分は笑顔、もう半分は歌とリズムでできているようなメンバーたち。家族のような親しみを覚えさせ、終わる頃には温かな気持ちにさせてくれるみなさんのショーに、何度も足を運んでくれたお客さんもしました。みなさんの生活ぶりに触れていて感じましたが、普段からの「人の温かみ」のようなものが、ショーに滲み出ている、それが観客席にも伝わったのでしょうか。

アムセグナッロ、ありがとう。(長屋あゆみ)

最新サーカス公演情報

★木下大サーカス

●埼玉公演 2012年9月15日(土)～11月18日(日)

●休演日:毎週木曜日と10月17日(水) ●電話:埼玉公演事務局 TEL048-269-0360

●会場:埼玉県川口市 上青木 SKIPシティ 特設会場

★ポップサーカス

●桑名公演 2012年9月15日(土)～10月21日(日) ●電話:桑名公演事務局 0594-25-8230

●休演日:毎週木曜日 ●会場:イオン桑名ショッピングセンター大テント会場

★リトルワールド “中国国立雑技団～超技～”

中国最高峰と名高い「中国雑技団」より12名の精鋭がリトルワールドにやってきます!

●公演期間 2012年9月15日(土)～11月25日(日)

●時間:[土・日・祝]11:00/13:00/15:00 [平日]11:30/14:00 ●休演日:毎週火曜日

●会場:野外民族博物館リトルワールド(愛知県犬山市)野外ホール ●電話:リトルワールド 0568-62-5611

★ハッピードリームサーカス

●榎原公演 2012年9月14日(金)～11月12日(月) ●休演日:毎週水曜日

●会場:奈良県橿原市五井町 163-1 大テント特設会場 ●電話:榎原公演事務局 0744-20-3121

その他公演情報

★パフォーマンスウィーク in 新宿ブーク人形劇場

■予約 Fax:03-3382-1899 メール:aotama@balloon-circus.com ■料金:前売 3,000円 当日 3,500円 共通券 5,000円

★やまやま会

■出演者 山本光洋・クラウン YAMA

■日時:2012年9月25日(火)19:00、26日(水)14:00/19:00

★いつもとなりに 2

■出演者 オペラ歌手と道化師ユニット 青い卵

■日時:2012年9月28日(金)19:00、29日(土)14:00/18:00

★ダメじゃん小出の黒く塗れ! vol.18 そこのけ!ここ野毛!シュールな笑いのトークにコント。

■日時:2012年9月29日(土)14:00/18:00 ■会場:横浜にぎわい座 TEL045-231-2515 ■チケット 1,500円

★太神楽曲芸師 二重丸◎「独演会」 江戸時代から伝わる伝統芸能、太神楽。初の独演会!!最初で最後かも?

■日時:2012年9月30日(日)13:00/17:00 ■会場:新宿ブーク人形劇場

■予約:Fax03-3382-2435 メール yui@balloon-circus.com ■チケット:前売り 1,500円 当日 3,500円 ペアチケット:5,000円